

ます。倉庫の中でベタリと坐ったまま何もすることもなく日を過ごします。それでもシラミだけは遠慮なくわいてくる。お天気のよい日は室外でシラミとりをする。そんな毎日が続く。

本当に日本内地へ帰れるのか

また伝染病が出たりしないか

デマや偽りの情報ばかり入ってくる

一日も早く帰りたい焦りと、不安と、何時になると帰れるのか、こんな毎日ではかなわんと焦り、不安、不平、不満が爆発しそうであるが、現在はまだもうメイファーズ。ひたすら耐え忍ぶのみ。前向きの苦勞でなく、後向きの苦勞である。在支期間中、一番嫌な思いの期間でありました。

復員して家へ帰ると、次の弟が一週間前に南支より無事帰っていて、お互いの無事を一家で喜び合いました。農家とはいえ、三月に帰宅した復員兵二人の飯米はありません。前年の十一月にその年の産米の供出割当てのためです。それでも農家のお陰で麦と野菜で補っておりました。作付面積も働き手二人の出征のた

め一町二反より七〇八反に減少していました。

復員二十三歳、結婚二十四歳、一男一女と孫三人に恵まれ、地域関係や職域関係の役員も永らく勤めて感謝され、二十年前に父を、去る九月に母を見送って、今は平和に年齢にふさわしく、落着いて生活しております。

独立歩兵第二十三大隊を永久に記念して「中支派遣血風戦友録」を第一号より第五号のシリーズ物として、今なお若い血をたぎらせ、戦友相寄り大いに談じ、相喜び相励ましております。

昔の夢を想い、亡き戦友の冥福を念じて、これからも元気で頑張ります。

## 思い出の軍隊生活

新潟県 長谷川 賢次郎

私達親子三人は東京の淀橋区(現新宿区)戸塚二丁目、早稲田大学の近くで生活していたが、昭和十七年

九月、本籍地新潟県見附町の生家から「九月十七日入隊の教育召集令が来た、速やかに帰れ」の通知があった。

私は二十六歳でしたが、十三日戸塚の家に妻子を残して十時三十分頃上野発、上越線回り、七時間半かかって見附駅に着き、生家に帰ったのは午後六時を過ぎた頃だと記憶します。召集令状には「東部第六十七部隊（新潟県高田）入隊」とありました。

当日、高田連隊から軍曹が一人見附駅まで迎えに来てくれ、部隊入隊は十一時過ぎであり、見附町からは二名でした。私は第五中队（潮田隊）配属で第三班に入ったが、お昼に班付兵長から「今日お前たちの入隊日であるから赤飯と尾頭付のご馳走でお祝いする」と言われた。夕食時に初年兵がマゴマゴしていると、古兵の目が光り「何時迄お客でない、夕食からお前達初年兵の番だ」と言われた。

翌日から古兵の目が光り、ビンタが始まった。当時私は初年兵の中で一番年輩者だった。また、班内には連隊一番の質の悪い一等兵の古兵がいたので、初年兵

には毎日ビンタが飛び、辛い毎日であった。私は若い頃に床や（理髪店）に遊びに行き、剃刀やバリカンが使えるので、よく下士官の顔剃りに呼ばれ、班内で吸えない煙草も、下士官から貰い、菓子も食べられた。年配者であることと、理髪の特業が私の初年兵生活を他より楽にすることが出来た。当時の軍隊教育は「上官の命は直ちに朕の命令であると心得よ」が悪用されていたので、私達初年兵にとっては、同年兵以外は皆上官である。

私達の班長は連隊一番の古参軍曹で、私と同じ位の年齢であって、武藤軍曹は可愛がってくれ、よく下士官室に行った。そのためか、十一月五日頃（一期検閲終了後）連隊本部の功績事務室勤務を命ぜられた。後日軍曹から話されたのだが「私が年配者で、訓練よりも功績事務室の方が良いだろうと思った」ということで現在も感謝している。

私が今でも思い出すのは山崎部隊長のことである。部隊長は時々練兵場に馬に乗って来られ教官に休憩を命ぜられた。そして我々の真中に腰を下して、「お前

達の軍隊生活はどうか」とよく聞かれ、まるで私達の親のようであった。年齢も五十五歳位だったかと思う。「お前達は班内で充分煙草が吸えないだろうから、好きな煙草を充分吸っても良い」と言われ、休憩も三十分くらいされた。

十二月十日頃に武藤軍曹と呼ばれ下士官室に行くと、「長谷川お前功績室に居残ったらどうか」と言われたので、私は、教育召集ですから一旦除隊出来ると信じ断った。ところが軍曹は「除隊は出来ない、お前達は召集解除と同時に臨時召集されて、中支に行くことになる」と言われた。

私達初年兵は、十二月二十四日午後営庭に集合させられた。部隊長より「教育召集を解除し、同日臨時召集、同日附東部第六十四部隊（千葉県佐倉）に転属」の命令が出た。

十二月二十六日に高田駅出発、ホームに部隊長はじめ将校・下士官が多勢見送られた。私がもし高田連隊に残ったら、十八年にアリューシャンのアッツ島で、山崎部隊長と一緒に玉砕したことでしょう。私は尊敬

する山崎部隊長並びに武藤軍曹に対し謹んで御冥福をお祈り申し上げている。

十二月二十七日午前中に東部第六十四部隊に到着し、営庭に集合させられたが、初年兵は高田、村松（新潟県）の両部隊だった。私は高田の戦友と、「中支派遣隊第六一〇部隊」に行くとしてその列に並んでいた。私達の部隊は後で判ったが、貨物廠の警備隊であった。

他の列は中支派遣独立混成第十七旅団（峯部隊）であるが、我々初年兵は「今日からは原隊と違って、ビンタ無しで眠れる」と思ったら相変らず、佐倉の過番上等兵にビンタを貰って眠るといふことで、軍隊という所は何処へ行ってもビンタが付いて廻ると思った。

十二月二十八日佐倉駅を午前に出発、軍用列車は客車で、山手線廻り高田馬場を通過した。私は戸塚の一軒家に住んでいたので、駅から早稲田方面を見渡せば我が家が見えるはずだが、軍用列車のために窓は開けられず、ただ「妻子の無事」を祈りながら、品川駅經由下関駅に到着したのは三十日午前九時半頃だった。指定の宿で、最後の夜の御馳走があり、我々初年兵は

腹一杯食べられ、ビンタ無しでぐっすり眠ることが出来た。

翌三十一日午前十時、下関出航、輸送船は三千トン級だったが玄界灘は荒れ、船は木の葉のようだったが夕方釜山着、大休止後、夜十一時三十分、奉天廻り北支經由、浦口向け約八日間の列車輸送である。貨車一両には約三十人乗り込み、動く余地も無い。奉天駅に着いた時には車内に氷が三寸位出来ていて、まるで冷蔵庫といっても過言ではない。我々は冬外套ではなかったもので、満州の冬は寒さを通り過ぎていた。早速奉天駅で藁を積み込んで毛布代わりにした。また、輸送中の食事は兵站部隊宿舍よりの支給だけで少なく困った。将校、下士官、兵も飯の配分にも目を光らせていて、一週間の空腹も辛いものであった。

一月八日、津浦線終着駅浦口に到着した。話に聞いていたが揚子江とは大きな河であり、対岸南京へ船で渡り上陸した。南京城内の部隊宿舍に入り四日間滞在した。我々初年兵は車中生活だったので、将校以下全員が下着から軍服までシラミが一杯で、ドラム缶に湯

を沸かす要員が多数動員された。私は理髪係で、兵隊の散髪をしたが一人当り約二十分で仕上げた。

南京から漢口の部隊本部までは中国の大きな船で揚子江を通航し、三日ぐらいで到着した。部隊本部では陸軍大佐板垣部隊長の訓示と我々の任務につき説明された。漢口は大都市で七階建のビルが沿岸に建ち並んでいたが、我々是对岸の武昌で一か月位の現地教育を受けることになった。

我々の部隊は本部と五個中隊編成で、教官は内地から一緒の見習士官、助教は各中隊の下士官と召集下士官であった。私は第一中隊に配属、教官は一緒だった榊原見習士官で、下士官は別府軍曹、高橋伍長、助手は古山兵長だった。翌日から教育が始まったが、内地と違い気も荒い、下士官も古兵も野戦経験者であるから張り切っている。特に古山兵長は厳しかった。ピンタは力一杯、また軍靴の底で顔を捻る。軍隊生活ではどうしようもない。別府・高橋両助教は良い人で感謝する。武昌の教育が終わり、漢口から自動車で第一中隊の所在地「沙門洋鎮」に行く。途中應城に一泊、二

月八日中隊に到着、中隊長以下全員が我々を迎えてくれ、古兵は内地へ帰還をした。

我々の任務は貨物廠の物資倉庫の警備で、歩哨は昼夜動哨しなければならぬ。衛兵所は七箇所で毎日上下番（上番⇨勤務につく、下番⇨勤務終了）、その他分遣地が二箇所あった。私は衛兵勤務二か月程で貨物廠本部の事務室要員の命令が出た。その後二か月程で今度は軍酒保の販売係を命ぜられた。

軍酒保勤務時代の話をしてみる。軍酒保は連隊酒保と違い、当時第十一軍司令官横山中将直轄の酒保である。販売品物は煙草一日五〜十万本、他に缶詰、菓子、日用品であった。兵隊が特に欲しい品目は煙草であった。当時はもう品不足で、一人二十本入五個に制限されていた。通過部隊の将校・下士官が、命令するように「煙草を余計売るように」と言われるが、私は職権で断ることが多く、口論にまでなることもあった。また、夕方五時半から八時半までに二個部隊の雑食（うどん・しるこ）販売係をする。

昭和十九年九月、高山茂中尉以下初年兵が入って来

たので、私たちは一か年の初年兵生活を終わって、古兵になったので大変楽になった。しかし、今度の初年兵は三十過ぎの年配者が多かった。私は自分の一年間の初年兵時代を思い、初年兵の面倒を見てやろうと決意した。同年兵の中には「申送りだ」とビンタを毎日とる者もいた。私は仲に入り初年兵を何度も助けたので感謝された。私は班内でビンタをやったことは一度もない。

その後また、分遣もさせられた。中隊から十キロ離れた潜江というところだった。私が長になり五名をつけて、船便で中隊を出て二日目に着いた。此処は米と野菜が多く、物資を買って前線へ送るのである。敵状が悪く夜眠ることが出来ない。何時でも自決出来るように手榴弾を身に付けていた。

この地区警備隊は十二名、私達が五名、三菱・三井の商社員が二名の計十九名であった。商社の人は物資を買って軍に納める。私達は倉庫に入った品物の警備にあたる。地区警備隊は熊本第六師団の九州男児で性質が荒かったが、友軍本部の連絡などない所であり、

敵状が悪く、毎夜が恐ろしかった。二か月分遣が終わりに中隊に復帰する。

次に湘桂作戦参加状況を話してみます。

昭和十九年八月、湘桂作戦参加のため漢口に集結する。漢口は沙洋鎮地区と違い四十度にもなるという暑さであった。九月十日、武昌より列車で岳州へ、当時鉄道には地雷が敷設されていたが、我々の列車は地雷を免れた。十時ぐらいで岳州に着いた。休養二日、三日目には長沙に向かい行軍する。毎日雨降りで、山また山、谷また谷の悪路の連続だった。

約八日間の行軍で長沙に着いた。街には幾百人の死骸があり、長沙攻略戦の厳しさを目の当りに見た。私は長沙で貨物廠の少尉の指揮下に入った。一個小隊位であったが私は長沙から目的地衡陽までの給与係を命ぜられた。給与係といっても行軍中のことで、各人にその都度、主食と副食を渡すのであるが、支給量を記載して、最後に軍経理部に提出しなければならぬ、不正があると責任を問われることになる。

長沙から一週間行軍し、易俗河の渡河である。ここ

は難所で、昼夜間共、米軍機が三十分おきに来襲して二百五十キロ爆弾を投下するのである。親子爆弾が投下されると一発が六発に、さらに十二発に分裂して爆発する。我々には初めての経験だ。また「漢口から衡陽行ききの自動車六千両が現時点では半数が爆撃された」と自動車隊将校が話をしていた。

こんな状態なので、私達は一か月位、山の中に穴を掘って暮らす。昼間は猫の子一匹いない。昼夜に限らず米軍機が来るからだ。この間日本の飛行機は一機も来なかった。後方よりは兵器も物資も補給がない。我々の隊は一か月半位かかって衡陽から三キロぐらい離れた所があったが、食糧は現地調達、自活生活であった。丁度周辺には支那人の農家があり、田園もあったので稻刈りをし、粳をビンの中に入れ棒で突いた玄米を食べる。

衡陽で四か月位衛兵勤務に服し、衛兵司令になった時巡察将校が来た。夜半十二時頃で仮眠中の私が起こされた。巡察将校は「ここは敵前である。責任者のお前が眠っているとは死刑の罪だ」と言う。私は「私は

死刑になるようであれば私の意見を述べたい」と申し  
た。その理由は「兵隊も食糧も後方よりの補給が無い。  
現在は兵器を捨てても兵隊を大事にせよと変わってき  
た。この衛兵所は着のみ着のまま十五日間連続勤務で  
ある。昼夜なく米軍機が飛来している。眼下は衛陽の  
町である。我々も人間であるので限度を越えたと身が  
もたない」と言ったら、巡察将校は私を褒めてくれた。  
私は衛兵司令が衛兵所の責任者であったので死を覚悟  
して意見を述べたのである。

南部粵漢作戦に参加、敵飛行場攻略について

昭和二十年二月中旬、貨物廠手島少尉の指揮下に入  
る。隊は一個小隊位であった。衛陽を出発、行軍五日  
目頃、大きな都市に着いた時、隊長に呼ばれ「お前以  
下五名は、地図に示す五キロ位先の所に食塩が大量に  
あるから、それを接収せよ」との命令を受けた。

翌朝未明渡河したが、川幅は広くとも浅瀬で助かっ  
た。川添い五キロの所に食塩が山と積まれた倉庫を占  
領した。支那では塩は貴重な品物である。敵は対岸に  
三百人ぐらいいいたが我々を攻撃しなかった。午後、軍

經理部の少佐の方が来られ塩を申し送った。その時、  
少佐に大変はめられ、約三千トンくらいの食塩だと言  
われた。作戦中の我々の任務は、一線部隊が目的地を  
占領すると直ぐ後統して、軍の物資収集班と収集物資  
を軍經理部に申し送ることになっているので小隊に  
帰った。

曲江飛行場攻略の命令を受け、同地を出発して三日  
目に後統隊（兵十五名、中国人十名）の長となって行  
軍する。ある日山の中で宿営することに決定し休んで  
いると、部隊最後尾の曹長以下約三十名が通りがかり  
「此処に居ると皆殺しになる」と言われたので曹長の  
指揮下に入り同一行動した。

途中、支那兵の小銃弾が飛んで来たが、死者、負傷  
者は一名も出なかった。十日目漸く本隊、手島少尉の  
許に着き、爾後行動を共にし行軍で曲江（韶州）に到  
着した。此処は水の都で、両面に河が流れ、住民はの  
んびり暮らしている。物資も多く、戦争が何処である  
のかと思われるほど長閑であった。私達は三日程休養  
し見物もしたが、広東に近いこの街を終生忘れられな

い。

今度、部隊は南支から再び中支へ向け反転するため、曲江を出発した。次の目的地坪石までは山また山で、行軍は鉄道線路の上だった。鉄道は山の中腹だったが、中支へ行く道は鉄路よりなかった。

五日程の行軍で坪石に到着したが、我が隊は半数の三十人位が落後した。実は私も落後者の一人であった。手島隊長は私に「残留者の責任者になれ」と命令されたが、その責任は重大である。

翌日早速、地区司令部に行き、田中副官に面会を求めた。幸い面会は許可され、私は隊の実情を副官に「当地に残留期間中、是非食糧の支給をさせたい、残留兵は三十二名、新聞記者一名、商社員三十五名であります」と申し上げた。しかし副官は「我が司令部は南支軍である。中支軍の命令には従えない、米一粒でも支給することは出来ない」との返答であった。この地区は山また山の盆地で、米一粒、野菜も採れない所全部輸送物資での生活である。私は、副官の言葉を聞いて、軍が違ふとこんな差別があるのかと、無念の思

いを胸に副官室を出たのである。

私は軍酒保販売の時に通過部隊の二等兵が「私はいから第一線に行くので煙草の配給を多く売ってくれ」と頼まれた。初年兵らしいし気の毒だったので、一人百本の規定のところを二百本売ったことがある。軍の品物を多く売ったことは悪いと思ったが、私の初年兵時代を思つて、年配の二等兵からの頼みなので余計に売ったのである。

私は副官室を出て考えた。部隊には必ず残飯があるはずであると、将校当番室へ行った。その時一人の当番が私に「兵長殿は元沙洋鎮で軍酒保の販売をしたことがあったでしょう」私は「その通りです」と答えると「私は煙草が大好きで、あの時は大変助かりました」と言う。私は残留隊の事情を話したら、当番は将校食の残飯を呉れると約束してくれた。そして、炊事場に行き炊事の残飯も貰えるよう世話をしてくれた。私はその当番兵に心から感謝申し上げた。

軍酒保で見知らぬ兵隊に、煙草を少し余計に売ったことで、今私達の一番困っている主食、人生生きるた

め食物が無いほど困ることはない。私は隊に帰り早速二枚の手拭で袋を持ち、袋の中に残飯、副食など一緒に入れて帰り、それを各人の飯盒に配給、その中に木の葉、草を入れ粥にして毎日生活をした。このことで、私は人間は人を助けると必ずその恩が返ってくると思つたのであります。

この場所には三十五日位居たと記憶するが、ある日広東から小舟で隼飛行隊の一個分隊が北上して来た。同隊の話では、ガソリン二百リットルのドラム缶一本あるが、自動車が無いので困っている。自動車を見つけてくれたら私達を中支まで便乗させても良いと言われた。

私は地区周辺の自動車隊を尋ねた。また、軍酒保販売所での私の顔を覚えていた他部隊の兵隊も多くいることがわかった。幸い自動車が五台、中支に帰りたいたがガソリンが無いので困っていると言うので、飛行隊のガソリンの話をしたら大変喜んだ。飛行隊のガソリンと自動車隊の仲人をし、我々三十五人が自動車に便乗を許可され中支に向かう。

私はこの時から、日本軍が負けると思つた。物資が全く無い。燃料、食糧、兵器等無いのだ。私達は次の地区の陳県という中・南支省境の町に着いた。此処に貨物廠分遣隊がおり、我々十五名は居残り警備することに決定した。残りの兵は自動車隊に頼んで各隊へ送つたのである。

昭和二十年八月に入ると、米軍機が毎日攻撃して来た。また毎日ビラを空中より散布して、「日本軍よ手を上げて降参せよ。本国日本は負けた」という内容でした。我々は直接日本からの情報が無いので信じなかつた。八月十一日後方の来陽の中隊本部に復帰のため同地区出発、十五日無事中隊に復帰した。

十八日午後一時頃、ラジオニュースで敗戦が放送され、日本は負けたと知る。終戦になると翌朝各部隊は船を見付けて後方に急ぐ、当時後方に退るには川が一番早く帰れるのです。我々中隊も船で岳州まで帰つた。岳州地区司令官谷少将がおられ、中隊は岳州の街から十二キロ離れた山また山の所に約八か月間生活した。此処が日本軍集結地であつた。

中隊の宿舎は掘立小屋であった。屋根、壁、皆草造りであり、雨漏りを防ぐため天幕を張った。当時の生活状況は、午前中は山へ行き薪取り、午後は魚獲り、草や芹採りだった。魚は揚子江の入江で、自分達の蚊帳を網代わりにして獲った。各自は配給の飯を飯盒に入れ、草や魚を混ぜ、少しでも量を多くして食べた。

ある日、斎藤准尉に呼ばれ「長谷川、お前は明朝から炊事勤務せよ」と言われた。私は現在の食糧不足の炊事は責任が重大であるので断ったら、それでは前線の道路工事に行くか（当期中隊から四十人位人夫として派遣されていた）と言う、そこで炊事に行くことにした。

炊事長横越曹長以下十名の兵隊がいた。私の任務は献立表と飯の分配であった。調理は内地で経験があった。飯一人宛の量は飯盒の蓋で半分である。毎日の食事であるため、一口の飯にも目を光らした。御飯の分配はその都度の飯の固さによって配分量が違ふ。出来るだけこわめの方が量が余計に見える。一食三百三十名分を各分隊に配分するのである。

丁度良く分配出来ないと、余ったり足りなかったりする。分配が不公平といふので週番士官が点呼の時に「明日より秤により配分する」と言われた。翌朝から、各分隊に週番士官立会いで分配した。容器は分隊により違ふ。飯盒、一斗樽、箱等であった。目方ですの時間がかかると、最後には何十人かが飯が不足する。一日やってみたがうまくいかない。結局は飯の配分は「目方でなく、元通りにする」と夜の点呼で週番士官が通達した。

我々の主食米、副食費は一人八十円宛であった。副食八十円位では良い献立が出来ない。卵一個五十円、野菜も高いので献立表作りには苦勞した。

農民が我々の寝ている所へ来て、欲しい物を手当たり次第持って行く。我々は時計などは土の中に埋めておいた。また、我々が寝ている顔に手鼻をして行く者が多かったが、戦勝国民に手出しは出来なかった。負けた国の兵隊の惨めさは、内地勤務者には判らない。

昭和二十一年六月初旬頃、復員の情報が入った。一同が待った復員である。それからは、毎晩内地のこと

ばかり語り合った。六月五日頃、現地出発、漢口―九江―南京までは船、南京―上海までは列車であった。

上海からは無蓋貨車である。貨車には鈴なりに乗り込んだ。一般邦人も一緒だった。燃料が薪なので何処で停車するか判らない。戦勝国の中国人は高級列車に乗って「南京―上海まで八時間」。我々は上海北站駅まで二十五時間であった。停車駅で四時間位、下車認可がなく、灼熱の太陽に照りつけられ列車の上で辛かった。夕方やっと下車命令が出た。

我々部隊は上海呉淞の砂原に駐留することとなり、部隊本部、一中隊―五中隊までがまとった。何年振りのことである。私は一中隊指揮班であった。ある日、日直下士官に付いて部隊の炊事場で食事分配の段取りをしていたが、熱発で交替して寝ていたら、軍医大尉の診断の結果「お前は別の所で休養せよ」ということで別天幕に移動させられた。

その後私は、六月下旬、上海青葉病院の分院に入院した。分院では毎日、入院患者が三十数人死亡したという。死亡した兵士も復員を夢見て上海まで帰り、今

一步で他界した。私が入院した時、全軍の兵士で一杯だった。上海は大陸の終結点であった。

七月上旬、分院より谷沢兵站病院に転院した。谷沢病院では馬小屋同様の病院生活であった。前の病棟は「コレラ患者棟」の中には、看護婦も入っていた。ここでも毎日数十人死んでいった。その時、死体埋葬のために一度使役に出たことがある。穴掘る場所が無く、二重掘りして死体を埋め、花輪を上げて冥福を祈って帰って来た。

七月三日頃復員命令が出た。毎日夢にまで見た祖国日本に帰る日が目の前に近づいた。上海飯田棧橋に午前八時乗船と決定した。船は一万トン級の病院船「高砂丸」である。七月八日朝、七時三十分自動車で飯田橋へ、上海より帰る復員者の最後と聞いた。残留者は戦犯要員と、残務処理者だけという。

私は帰るに当って、残留者が一日も早く復員出来るように祈って乗船した。五年振りに見る日本の山々、予定通り佐世保港に上陸した。予防注射を済ませ、佐世保海兵団宿舎に入る。夕食に米が支給された。四合

の米を飯盒一杯炊き、副食は塩だけであったが、一年振り腹一杯の食事は美味くて一生忘れることが出来ない夕食であった。

我々の部隊は病院入院者のため、満州、北・中・南支等混成部隊で、私は第五分隊班長と復員事務を命ぜられ、二日間業務をした。七月十二日佐世保へ大阪間は軍用列車、大阪で各地区毎に東海道、東北方面と、北陸線に別れ、普通列車に乗り換える。私は部隊と上海で別れたため一人で新潟県へ帰った。富山県の高岡駅で妻子に電報を打った。七月十五日、親兄弟、妻子の待つ見附駅に到着した。駅には妻子が出迎えてくれた。

昭和十七年九月召集出発の時、長女は七十二日目だったが復員したら、もう五歳になっていた。しかし、生家では兄弟四人が出征し、幸い私と末弟二名が復員、兄「誠吉」、弟「勝」二名の戦死の報が入っていた。

## 中支宜昌付近の戦闘

—第十三師団歩兵一〇四連隊—

宮城県 加藤 清 一

私は大正七年四月十二日、現在の古川市堤根字中屋敷二五（当時は宮城県志田郡高倉村字堤根三〇）で生まれました。家は農業で、祖父母、両親健在、兄弟は男三人、女六人で今では珍しい大家族でしょう。

昭和十三年の徴集兵、四月の検査で甲種合格、入営へ入営し、一期検閲は七月末でした。八月上旬、同年兵の主力は中支の歩兵第一〇四連隊（第十三師団）に転属したが、私は原隊に残りました。

原隊での初年兵教育は厳しかった。飯が食えない程でした。古参兵は満州帰りの歩兵第四連隊の人、朝鮮の羅南、関東軍帰り及び後備兵と何段階もいた。内務班は辛い、毎晩ビンは消燈後で、何処かの班で始ま